
桜色舞うころ

とーや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜色舞うころ

【Nコード】

N4176B

【作者名】

とーや

【あらすじ】

花見に来ていた哀は、夜の桜と自分を重ねていた。哀と光彦の話です。

桜色舞うころ　わたしはひとり

夜に舞う桜の花びらを眺めながら、わたしはそんなことを思っていた。

少し離れたところに光が見える。ベンチに腰を下ろし、その光が集まる場所を見つめた。

遠目からでもおおよその表情はうかがえる。

ネクタイを頭に巻き、酒瓶を片手に陽気に踊る、小五郎のおじさん。ここぞとばかりに、普段は控えている高カロリーのご馳走を食べている博士。花見の今日くらいは、大目にみてあげる。

その隣では、小嶋くんがすごい勢いでお肉をほおばってる。3人とも、とても幸せそう。

呆れ顔で飲み物を口に含んでいるのは工藤くん。でもどこか楽しそうにしているのは、隣に蘭さんがいるからかしら。蘭さんの隣には吉田さん。ちらちらと彼を見る仕草が健気ね。工藤くんに気づいている様子はないけれど。

円谷くんは周囲に気を配っていて、あまり箸が進んでないみたい。

平穏で温かいこの日常が、とても心地よかった。

だけど、この心地よさに慣れてはいけない。決して、慣れてはいけないのよ。

なぜなら、いずれわたしはひとりになるんだもの。

闇のなかにひとり。真っ暗な闇のなかで、たったひとりに。

風が吹いた。桜の花びらたちが、わたしを嘲笑うかのように舞い踊る。

花びらを1枚つかまえて手のひらにのせた。闇に包まれ色を失ったその花びらは、なんだかとても儚くて、意味のない存在に思えた。まるで、わたしのように。

「灰原さーん」

わたしの沈んだ気持ちとは対照的な声色。その声の主は、円谷くんだった。

「気分はよくなりましたか？」

駆け寄ってきた彼が心配そうに聞いてくる。

「ええ。たいしたことなかったわ。賑やかなところは苦手だから、もう少しここにいますけどね」

気分が悪くなったというのは口実で、本当は静かな場所にいたかっただけ。

「それはよかったです。あの、ボクもここにいていいですか？」

「別にいいけど……」

わたしはそっけなく返事をした。その言葉とは裏腹に、心のどこかでは安心している自分がいた。誰かにそばにいてほしかったのかもしれない。ひとりでいるのは、不安だったから。

彼がわたしの隣に座る。

さっきまでのどうしようもない不安が、ほんの少しだけやわらいだ気がした。

「夜桜、きれいですね」

「そうかしら？」

わたしは円谷くんの言葉に敏感に反応した。無造作に花びらを拾い、彼に見せた。

「ほら、この色を失った花びらに、なんの魅力があるの？　きれいなわけないじゃない」

いつになくムキになっていたかもしれない。簡単に、きれいだななんていつてほしくなかった。褒めてほしくはなかった。

「そんなことないですよ。見てください」

彼は微笑を浮かべ、わたしの手からそっと、闇に包まれた花びらをとった。そして、地面からも花びらをすくいあげて、近くにあった外灯の前にたつ。

「いきますよ」

その声とともに、手にしていたっぱいの花びらを、空高く舞い上げた。

「あつ……」

外灯の光に照らされ、舞い落ちる桜の花びらたちには色がついていた。一瞬、心が奪われるくらいの、きれいな色が。

「夜の桜は、様々な表情^{いろ}を持つてると思います」

優しく微笑む彼が、頼もしく思えた瞬間だった。

「ボクは、夜桜のほうが好きです」

「えっ……」

「可憐で美しい、昼に見る桜もいいですが。静寂な感じがして、どこか儚げな夜の桜に惹かれてしまいます」

自分のことをいわれているわけでもないのに、なぜかときどきとしてしまう。

「灰原さんは夜の桜に似てますね。ボクが灰原さんに惹かれているのは、その辺の関係もあるのかもしれない」

ちらりと彼を見ると、ほほが桜色に染まっているような気がした。

「もう、大人をからかわないで」

「子ども扱いしないでくださいよー。灰原さんだって子どもじゃないですか」

「あ、それもそうね」

ふたりで笑った。密やかに笑いあった。

もしかしたら、わたしのほほも桜色に染まっているのかもしれない。暗がりではわからないだろうけど。

いつになく素の女の子になってしまったわたしは、照れ隠しで桜の木に目を移し、この心地いい時の流れに身をゆだねた。

「きれいな、夜の桜も…」

「哀ちゃん」

「光彦、早く来ないと全部食べちゃうぞ！」

光の集まる場所から声が聞こえた。吉田さんと小嶋くんの声だ。

「はい。今行きます！ さあ、灰原さん」

差し出された彼の手に、自分でも驚くほど自然に手を重ねた。

彼には聞こえないように、小さくつぶやいた。

ありがとう…。

桜色舞うころ わたしはひとり じゃなかった

来年も この先もずっと そうだといいな——…

（後書き）

あとがき

読んでくださりありがとうございます。

桜の季節にはまだ少し早いですが、勢いで書いてしまったので投稿しました。

前作のコナン小説同様、好きな歌のいちフレーズから話をふくらませました。中島美嘉さんの「桜色舞うころ」という曲です。

文章はすらすら書けたんですが、今回もあらずじに苦戦（・・・；もし感想などがありましたら、お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4176b/>

桜色舞うころ

2011年4月13日17時23分発行